

人生を拓く

23

吉野和夫さん (83) 西町3

父清作さん(昭和40年代に80歳で没)、母ノブさん(平成12年ごろ99歳で没)の2人姉弟として東川で生まれ育ちました。

清作さんは、富山県から入植した祖父の二男として育ち、分家して現在の地で自転車屋を創業したそうです。夏は自転車屋、冬はブリキ屋として商売し、自転車販売、修理と手作りストープ、煙突を販売しました。

和夫さんが小学校1年のころに徴兵で旧満州(中国東北地方)に出兵し、1948(同23)年に帰国したそうです。

中学校を卒業後旭川工業高校に進み、家業を継ぎました。自転車屋の傍ら、30歳になった1967(昭和37)年ごろに吉野ポンプ店として装いを一新。長く町のポンプ屋さんとして頼りにされ、2年前に廃業しました。店内にはまだポンプの部品を置いてあり、同業者が古い部品を時々探しに来るそうです。

「自転車屋は夏しかできんしよ。『冬なんとかせにゃならん』と親父はブリキ屋を始めたんだ。オレが店継いだので、何とかせにゃならん。そのころから町内じゃ電気ホームポンプで水を汲み始めていたから、冬しばれて困ってた。それでポンプ屋を始めたんだ」。



「水が出なけりやお湯も沸かせん。お客さんに言われたら何時間かかっても直さなやいかんからさ」「うんとしばれると1日に4、5件は呼ばれたね。最近は家が立派になったから凍ることもなくなった」。

「小学生のころは家の前に小川(農業用水路)が流れていて、川で石投げしよう遊んだ。電車が走ってたころは、秋に水切るとヤマベやどじょうがいっぱいいた。それをすくに行つたもんさ。秋サケも上がつとつたな。ホツチャレじゃなかったよ。友達と一緒に遊んだ思い出が鮮明に残っています」。

「農協の所に米検査場があつてな。10月末から11月いっぱいまで、米の検査で長沢商店の所まで馬車がずっと並んどつた。馬が俵に食いつくと俵から米がバラバラこぼれるんだ。夜になったらそれを拾い集めて出たな。食いつく馬は耳に赤い札がついていて『食いつかれるから行くなよ』って親父によく言われてた」。それは秋の風物詩でした。

25歳で妻辰子さんと見合い結婚。51年間連れ添いましたが、8年前72歳で先立たれ、今は一人暮らしです。お正月にひ孫を含めて10人ほどが集まりにぎやかなひとときを迎えるのを楽しみにしています。

俳句

度忘れし辞書をたよりに山笑う
 それぞれの胸に花あり卒業子
 校庭に生徒消えたる春休み
 ログハウスシヨパンながるる木の根明け
 大丈夫ぼんと背を押す春一番
 のんびりと引き出し整理春休み
 田に堆肥運ぶ道産子春休み
 あこがれの先生嫁ぐ春休み
 来るならばひとりでおいで風と雪
 先生もちよつとひといき春休み
 第二ボタン無いひと胸に春休み
 春浅し版画のごとき靴の跡
 行く春に老母娘の家へ越していく
 春休み過ぎればひとつお兄ちゃん
 春休みってスクランブル交差点
 鳥の巣の育む命を見守りし

杉山 ひろのり
 保科 なほ
 徳光 吐苦
 杉山 りつ
 こばやし 星来
 横田 則子
 若田 久
 高瀬 潤
 石澤 清宏
 三島 智
 若田 郁
 本田 咲
 佐々木 りえ
 山内 みゆ
 小林 ろぼ
 高橋 公花

